

Port Town Vitamin

KAGOSHIMA ICHIKIKUSHIKINO CITY



いちき串木野市って
どんなまち？

ICHIKI
KUSHIKINO
CITY

面積

112.3 km²

人口

26,229 人

2023年5月末現在

「いちきくしきのし」と、3回
噛まずに言えたら願い事が
叶いそうな名前のこのまちは、
鹿児島県本土西側の東シナ海
沿いに位置し、西は日本三大砂
丘のひとつ「吹上浜」北端の海
岸線、東は徐福伝説が残る霊峰
「冠嶽」と、海と山に囲まれてい
て、比較的気候も温暖な場所
です。距離的に鹿児島名物「桜島
の火山灰」が降ってくることも
珍しいです。

昔から、マグロの遠洋漁業や、
薩摩街道出水筋の宿場として
海沿いから栄えてきました。
そしてその広大な東シナ海を
前に、近代日本の礎を築いた
薩摩藩英国留學生がイギリス
へと旅立った地でもあります。
「太郎太郎祭り」や「さのさ祭り」
など、古くから親しまれた伝統
芸能や郷土芸能、季節それぞれ
に特色豊かなイベントや祭りが
多いのもいちき串木野市の
特徴のひとつです。

交通インフラにおいても、駅が
3つ・高速道路のインターが
2箇所あり、生活環境と利便性
に恵まれています。

PORT TOWN VITAMIN

日照条件の良さから柑橘類の栽培も盛んで、昔からの地域ブランド「大里みかん・大里ポンカン」の人気は根強く、昭和60年に全国公募で名付けた「サワーポメロ」の美味しさの更なるPRとブランド化にも力を入れています。

そんないちき串木野市の柑橘を育てている人たちのインタビューなど、柑橘の魅力をちょっと覗いてみようかと思えます。

ACCESS

高速バス+JR

鹿児島
空港

高速バス
約40分

鹿児島
中央駅

JR
約30-40分

串木野
駅

高速道路

溝辺
鹿児島
空港IC

九州自動車道
約30分

鹿児島
IC

南九州西回り自動車道
約30分

串木野
IC







「ターンで就農した愛知県出身の磯部泰良さん。農業に興味を持ったのは、家庭菜園を始めた小学生時代。幼い頃から果物が好きで、つくるなら自分の好きな果物をと鹿児島県立農業大学校（以下、農大）に進学した。卒業後、指宿の農園で三年間経験を積み、農業を学んだ後、いちき串木野市で就農して五年が経つ。現在は露地とハウスで使い分けながら大将季をはじめとした柑橘と、ぶどうを栽培している。休みの日は、同世代と食事や飲み会などでリフレッシュする時間も忘れてはいない。

いちき串木野市への「ターン」就農のきっかけは、農大の研修だった。農大時代にお世話になった農家さんや県の職員の方々との繋がりもあり、愛知ではなく鹿児島での就農を決めた。就農して最初に抱いた印象は、周りの人々の温かさだという。

「周りの方々がよくしてくれるか

ら、あまり頼りすぎないように…….
 と思いつつも頼ってばかりなんですけど。そこは感謝しています」

果樹栽培は最初の結果が出るまでに十年はかかると言われている。収入は果樹が売れたとき。毎月安定して収入を得られるわけではなく、果樹を出荷する短期間で一年分の収入が入る。どんな仕事も同じだが、果樹農家も決して楽な道ではない。「人に簡単に勧められない」と語る中で、心に温もりを感じる人々との助け合いの輪が見えてきた。

調べればなんでも答えが出てくる今の時代。それでも磯部さんは、自分の目で直接見て、人に聞きながら自身との違いを考えることも多い。「分からないときは知り合いの農家さんや農協の人に聞いたり、同世代と情報交換したり。一人だったら厳しいですよ。でも、今は先輩ができて一緒に作業するのが楽しみにもなっています」





人との付き合いを日頃から大切にしている磯部さんは基本「頼まれたら断らない」。アルバイトや手伝いを頼まれるときも、その日の都合が悪ければ別日を提案して引き受ける。それは果樹農家だけでなく自分とは異なるものを育てている農家や、大工などの全く別の分野の人でも変わらない。今では手伝いの声も多くなると人気者で「やめようと思っていたけど、彼の助けがあるから、もう少し続けようかと思う」という声もあるほどだ。

「何事もどこでどういう縁があるか分からないですから」

いちき串木野市で就農を決意して、土地の借り受けをはじめとした就農準備期間の人やタイミンングの縁を磯部さん自身が身をもって感じているからこそ、その言葉には説得力があった。前述の通り、果樹栽培は植え付けから果樹が実るまでに時間がかかる。その間はもちろん収入がないので、果樹栽培を考えているなら、もともと果樹を栽培している借り受け後、すぐに収入が入る土地を借りの方が好ましい。新規就農を目指す人がいる一方で後継者がおらず土地を手放したいと思っ

ている人もいる。しかし、「もうやめる。誰かに貸す」と言ってもいざ土地の引き継ぎをとると、これまでの愛着から手放すのに時間がかかるのが現状だ。この現状にも磯部さんは「縁の大切さを噛み締める」。

「やっぱり縁ですよ。自分も土地もちょっとタイミンングが良くて地主さんもいい人で。本当に縁です」

引き継ぐものは土地といえど、重要なのは人と人。土地の引き継ぎや貸し借りにおける契約内容も十人十色だ。だからこそ新規就農者と地主の信頼関係の構築は必要不可欠である。

とても身近で、身近ゆえに見落としがちな「人との縁」。広く繋がり、深く築く。それは一人で栽培する農家も同じだった。仕事もプライベートも人との付き合いを楽しみながら広げていく磯部さん。ひとり愛知から遠く離れた鹿児島で農業の道へ進んだ彼の暮らしに来年の秋からは両親も加わることになり、益々、温かい「人との縁」が広がっていくことだろう。

Writer：屈橋穂花

物語ライター・編集者。物語の執筆を得意とする。ヒアリングから文章や言葉による見える化を行い、記憶や想いの整理・記録に寄り添うサービス【紙に月】を開始。好きな言葉は「弱いから泣きます。強いから生きます。」人間らしい強さも弱さも愛したい。

(2022年11月取材)

